

講演会「祖父マハトマ・ガンディーの非暴力思想と21世紀の世界」の報告

中山 弘正

12月7日午後、アルン・ガンディー氏をお迎えし、上記のテーマで講演会が行われた。

氏は23日から日本各地で講演され、この日は朝、沖縄から飛んでこられたのである。

マハトマ・ガンディーから「非暴力」思想のことを最初に教えられたのは、短くなった鉛筆を自分が捨てたら、それを長い時間かかって探させられたときのことだった。資源の無駄使いは「自然に対する暴力」、そしてそれさえも使えない貧しい人々に対しての社会的暴力でもある、といわれた。物理的暴力と非物理的暴力（差別等々）の系統図を書いて教えられたので、以後、自分はよくその日に犯したことをその図上のどこにあるのか考えつつ反省した。

南アフリカの政変後、非暴力ワークショップの開催を依頼され、訪れたところ、武装グループが話したいという。緊張したが、銃を脇に置いてもらってよくよく話し合うと、彼らはふつうのちゃんとした生活ができないので、社会に対し怒っていたのだ。後に彼らは武器を捨て、非暴力運動に加わったという。

ソマリアには軍事介入で100億ドルも使ったが、それだけお金があれば、もっと前に生活面、産業面に出して上げていれば、

戦争という手段に訴えずにすんだかもしれないのだ。

いずれにしても、他の人々が何を望んでいるのかということへの共感、愛、理解といったものが「怒り」ですら（ちょうど電気のように統御すれば）有効な力に転じうるのだ。差別し、差異を強調し、相手との間に壁を築いていく限り、暴力は、個人でも国家でも無くならない。宗教も差異を強調するのではなく、どの宗教にもある愛とか理解などで、人間が一つになる方向でなければならぬ。

質疑では、M. ガンディーへのキリスト教の影響のこと、また、カースト制に対するガンディーの考え（法律を作っただけでは差別は無くせない等）などが問題になった。

学部生、院生など70～80名くらいが参加し、とても良い学びができたと思う。アルン氏の深くもの思わしげな相貌は忘れ得ぬ印象を与えたことであろう。国際平和研の竹中先生（通訳の労をとられた）、涌井先生（司会）、勝俣先生（挨拶）、また両事務局のご尽力に深く感謝したい。

なお、アルン・ガンディー氏に関しては、塩田純著『ガンディーを継いで』（NHK出版）がある。

（なかやま ひろまさ）

所員・経済学部教授）